

かい き がく えん
怪奇学園②

し きしょうがっこう のる おおかがみ
四季小学校と呪いの大鏡

ウェルザード・作

せ
びろ瀬・絵



アルファポリスきずな文庫

目次

第一章 永遠えい えんに続くつづような地獄じごくの廊下ろう か…… p6

第二章 体育館たい いく かんは遊ぶあそのも命懸けいのち が…… p55

第三章 そのドアさきの先かがみに鏡かがみはあるあるだろう…… p104

第四章 元もとの世界せ かいで考えるかんがことは…… p154

第五章 春香はる かの家いえ…… p174

登場人物紹介

川端先生

春香たちのクラスの担任。頼りなく、生徒からいじられることも。実は悪魔と入れ替わっていた。

マサフミ

春香たちのクラスメイト。けんかが強く、わがままな性格。

カズキ

春香たちのクラスメイト。マサフミの友達。

雪丸冬菜

愛されキャラで、班の意見のまとめ役。春夏秋冬班の一員。

秋本昂

クラス一の秀才、いつも冷静。実は運動が苦手。春夏秋冬班の一員。

夏の野太陽

友達を大切にする熱い男の子。運動神経が良い。春夏秋冬班の一員。

菜花春香

本作の主人公。運動も勉強も苦手だが、優しい心の持ち主。春夏秋冬班のリーダーで、仲間思い。

春夏秋冬班

第一章 永遠に続くような地獄の廊下

これまでの経過をまとめると、私たち「春夏秋冬班」の四人は、クラスメイトのヒナコの相談を受けて三階倉庫にあるという「呪いの大鏡」の前までやって来た。

ここで別のクラスメイトが、担任の川端先生に殺されたという話を聞いたのだけど、調べてもそれらしい痕跡はなかった。

それもそのはずで、ヒナコと川端先生は鏡の中の悪魔と入れ替わっていたから。

目的は、悪魔と入れ替わる人をごんごん増やすこと。

鏡の中と外の世界の住人を入れ替えて、何をしようとしているかはわからないけれど。

そして私たちも鏡の中に入れられて、元の世界に戻るために「呪いの大鏡」を探している。

四季小七不思議の怪物に殺されるたび、少しずつ悪魔と身体が入れ替わってしまうという、意味のわからない条件の下で、なんとか教室のある建物を取り越えて、いよいよ私たちは職員室がある建物へと移動を始めた。

あと少し。

隠された謎を解明して、「呪いの大鏡」を見つけて、元の世界に戻るんだ。

「ところで、誰か解けた？ どこに行けばいいか」

放送室から廊下に出てすぐに、私はみんなに尋ねた。

「ただ、誰も返事をしない。」

太陽には特に期待はしていないけれど、昴と冬菜が黙っていると、難しいんだらうな。

「来たるときにその場所を選べ……となると、今はそのときではないのか、それとも僕たちが行ったときこそがそのときなのか。よくわかりませんが、とりあえず図書室を調べませんか？ まだ見ていませんし、端の部屋なので」



そう言っいて鼻すばらは右みぎのほうを指差ゆびさして、私わたしたちもそれに続つづくことに。

廊下ろうかに出でて感かんじたけど、今いままでになく空気が重おもい。

ますます暗くらく感かんじて、廊下ろうかの壁かべが奇妙きみょうに盛り上あがって……悶もだえる人ひとの顔かおに見える。

「な、なんかさらに不気味ぶきみになったよな。悲かなしそうな人ひとの顔かおに見えるの俺おれだけか？」

太陽たいようが顔かおを引きひつけてそう尋たずねるけど、私わたしにもそう見みえるし、勘違かんちがいだと思おもいたかつたのにそうもいかなくなつてしまつた。

しかも、ただ模様もように見えるだけならいいんだけど、叫さけんでいるように見みえたり、蠢うごめいているのがわかるから怖こわいんだ。

強つよい念ねんが凝こり固かたまつたような、そんな風ふうに見える。

「図書室としょしつは……鏡かがみはないですね。見みただけでわかるのはありがたいです。図書室倉庫としょしつそうこにも

ないみたいですし、職員室しやくいんしつに行いきましょう。児童玄関じどうげんかんの前まえを通とおるなら、外そとに出でられるか試ためしてみてもいいですし」

「謎なぞを解とくのも忘れわすれずにね。いつ、『来きたるとき』が来くるのかわからないんだから準備じゆんびはしておかないと」

「そうですね。では僕は黒板の文字の整理をします。もう少しで解けそうな感じなんです
が……」

四人で固まって歩き、放送室を通りすぎて職員室のほうに向かう廊下に入った私たち
は……絶望した。

「お、おいおい……な、なんだよこりやあ！」

太陽が声を上げたけど、ここにいる全員が同じことを考えただろう。

普段なら、それほど長いと感じない廊下。

こちらの世界でも同じ長さで、それ自体はいいんだけど。

ガシャンガシャンと、巨大な刃が廊下の壁から飛び出して、ここを通ろうとする人の行
く手を阻んでいたのだ。

手前は床から天井まである巨大な刃が上下左右の壁から挟むように飛び出して。

その奥では半月状の刃が振り子のように左右に振れている。

そこから先は、刃が邪魔で見えない。

あまりにも変わりすぎている校舎に呆気にと取られていると……突然刃の動きが止まり、

奥から奇妙な人間のような人影がこちらに向かつて歩いて来ているのがわかった。

「ヒッヒッ。おや、また新しいお客さんだ。ちよいと待ってくださいね。今こいつを片

づけちまうんで」

小学五年生と同じくらいの身長だけど、腰が曲がっているのか前屈みで。

何かを引きずっていると思ったらそれは、腰から分断された死体だった。

その顔は目がギョロつとしていて、物語に出てくる魔女のように鼻が大きい。

そして何より……その引きずられている死体は、クラスメイトのマサフミだった。

男……か女かわからない、作業服を着た異形の人が死体を引きずって私たちの前を通り、
放送室に入る。

と、同時に怒声のようなものが聞こえて、勢いよく放送室から人影が飛び出して来た
のだ。

「くそっ！ くそっ、くそっ、くそっ！ ふざけんなよ、もう少しだったのによ！」

その声には聞き覚えがある。

いや、それどころか、その姿も今しがた目の前を通りすぎて行ったからわかる。

「マ、マサフミか。お前もこつちに来てたんだな！」

嬉しそうな声を上げた太陽だったが、この世界にいること自体は全然嬉しいことじゃないんだよね。

まあ、マサフミがいるであろうことは、二階の死体置き場で姿が見えたから予想は出来ていたけど。

「あ？ なんだよ、『春夏秋冬班』かよ。お前ら……ああ、雪丸は見た目にもわかるくらい悪魔になつてんのな。お前ら、ここまでは運良く来られたかもしれないねえけど、ここを通り抜けられるとは思えねえな。運動オンチの秋本と菜花がいるんだからよ」

出会った途端に憎まれ口を叩くマサフミに、運動オンチと言われた私と鼻は顔を見合わせて苦笑いを浮かべた。

元の世界でも、お兄さんが喧嘩が強いとかでやたらと強がっている。私はマサフミが苦手だった。

確かに、今までと違って誰かがなんとかすればいいってわけじゃなさそう。全員がここを通らないといけないってことだよね……」

冬菜の言葉を聞いて、私は驚いてもう一度廊下を見た。

刃が、まるで工場の機械のようにガシャンガシャンと規則正しく動いていて、この間を通り抜けるなんて無理だ。

大縄跳びでさえ引つかかってしまう私が、ここを通り抜かれるとはとても思えない。それほど長くない廊下が、どこまでも続く無限の廊下のように見えるのだ。

「ところでお前一人か？ 他に一緒にいるヤツはいないのかよ？」

太陽がそう尋ねると、マサフミは不機嫌そうな表情で。

「カズキは先に行つた。ユウヤとマユはもうとつくに死んで、悪魔になつたんじゃねえ



の？ 生き返らなくなつたつてことはそういうことだろ」

吐き捨てるようにそう言つて、廊下のほうを見つめた。

だけど気になるのはマサフミの態度だ。

クラスメイトが、友達が悪魔と完全に入れ替わつてしまつたというのに、悲しみを感ぜない。

この怨念渦巻く鏡の世界で、苛立つのはわかるし、思い通りにならなくて腹が立つのもわかりはするけど。

「もう生き返らないんだ……マユとユウヤ。悲しいね」

「はあ!? あいつらが死んで、なんで悲しいんだよ！ カズキの野郎は先に行つちまうし、俺一人が苦勞してんだろが！ そうだ、お前ら俺を手伝えよ。俺はどうにかして元の世界に戻りたいんだよ」

元々好きではなかつたけど、なんて自分勝手な言い分だろう。

日本人形も笑う女も山田も、みんなで力を合せて乗り越えられた。

だけどマサフミの言動を見ると、マユとユウヤは犠牲にされることが多かつたんだ

ろくなと邪推してしまふ。

「おい、マサフミ。元の世界に戻るために手伝うのはいくらでもしてやる。だけど俺の班を道具みたいに扱うのは許さないからな。俺たちは、四人で力を合せてここまで来たんだ。お前一人のために犠牲にする命は持つてないぜ」

そんな中で、太陽がマサフミを睨みつけ、低く強い声でそう反論したのだ。

「太陽っ！ その仲良しこよしがいつまで続くとおもうと思つてんだ!? 結局人間は一人なんだよ！ 信じていたカズキは一人で先に行つたんだ！ 俺を見捨ててな！」

話は平行線。

私たちとマサフミは絶対に交わらないだろう。

マユとユウヤがマサフミの犠牲になつたであろうことは、その姿からもなんとなく推測出来た。

いつからここにいるかはわからないけど、少なくとも私たちよりも早くこの世界に來たはずだ。

なのに、変化しているのは右手だけ。

「どれだけ死んでいないか……どれだけマユとユウヤに死を押しつけて来たのかがわかった。」

「ヒッヒヒ。お友達と再会出来たようで何よりですな。先に進みたいくば、ここをお通りください。失敗しても心配することはありません。私が亡骸を回収しますので」

この異形の人は、今までの怪物とは違って、悪意も敵意もなさそうなのはよかったけど、決して安心なんて出来ない。

クラスでも運動神経がいいほうのマサフミが失敗して死ぬような場所なのだ。私と昴は絶望を感じる。

「最初は横から挟むように刃が出てきています。次は床と天井から。その奥は……両方の複合ですか。う、うーん……こ、これは……無理ですね。僕じゃ無理です」

冷静に分析しようとした昴が、早くも諦めるような言葉を吐き出した。

やめてよ。昴が無理なら私も無理ってことじゃない。

大縄跳びなんて生易しいものじゃない。

挟まれたら、放送室の奥の部屋にあったような死体になるのだと思うと、とてもじゃない

いけど行こうとは思えなかった。

今回ばかりは誰の助けも得られない。

一人でどうにか切り抜けるしかないのだ。

「ど、どう？ 春香ちゃん。行けそう？」

「む、無理……絶対こんなの無……」

冬菜との会話の途中。

首を横に振っていた私の背中に、強い衝撃が走った。

ドンツと押されて、高速で移動する刃に向かって、私の身体が軽く飛んだのだ。

あ、死ぬ。

真つ先に思ったのはそれだった。

何が起こったのかとか、どうしてこうなったのかとかは考えなかった。

ただ、目の前に死があつて、そこに向かっていてという感覚だけだった。

ガシャンガシャンガシャンガシャンガシャンガシャンガシャンガシャンガシャン！

死ぬという思いで身をすくめ、私は床に倒れ込んだ。

顔を上げると、私の前と後ろで刃が高速で動いている。

「よ、よかった。わ、私生きてる！ 生きてるよ！」

死んだと思つた直後、運良く生き延びた喜びに震えて、振り返つてみんなのほうを見ると……冬菜と昴が引きつった顔で私を見ていて、両手を突き出して笑うマサフミに、太陽が向かっているところだった。

そして気づく。

ズキンとした強烈な痛みがあとになつて襲いかかつて来て。

私の右足はスネの真ん中で切断されて、血を噴き出していたということ。

「あ、痛い」

小さくそうつぶやいた瞬間。

ゆつくりに見えた世界が急に動き出して、太陽がマサフミと取っ組み合いの喧嘩を始めただった。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！ 足が、足がなくなつちやつたよ！」

ああああああつ！」

「は、春香さん！ もうこうなつては助けられません！ なんとか廊下を渡り切つてくだ

さい！」

痛みへのうち、自分の悲鳴で人の声が聞こえない。

かろうじて昴の声は聞こえたけど、右足がないのにどうやって先に進めというのか。

「ひっ……ひっ……痛いよ……痛いよ！」

すぐに殺されるわけではない。

この苦痛から早く逃れたいと、必死に手を伸ばしたけど……その手は次の刃に切断され、左手首から先がなくなつてしまったのだ。

「あ、ああああああつ！」

早く行かなきゃ、先に進まなきゃと考えれば考えるほど焦りが生じて、無謀な行動に出してしまう。

激痛が全身を駆け巡り、脳を刺すような苦痛に身をよじらせる。

もう嫌だ、どうして私こんな目に遭わなきゃならないの。

自分で飛び込んだならまだしも、どうして人に押されてこんな目に。

「あ、あ……早く行かなきゃ……死ぬ前に通り抜けるんだ……」
痛くて勝手に目から涙がこぼれ落ちる。

ただでさえ運動神経が悪いのに、手足を失った状態でまともに動けるはずもなく、混乱状態の私は失った左手を伸ばして。

徐々に輪切りにされて行く腕を見ながら、苦しみから逃れたい一心で刃に飛び込んだ。

ドサツと、床に倒れた私は……まだ生きてる。

二つ目の刃を越えたけど、三つ目はなんて恐ろしいのだろう。

上下左右から刃が飛び出し、前の二つよりも過酷なのは明らかだった。

「はあ……はあ……なんで。頭がボーッとして来た。痛みはあるけど……私……どうなってるの」

身体が思うように動かない。

その理由はすぐにわかった。

もう、私の太ももから下は両方なくて、歩くことが出来ない。

この状態で三つ目の刃はとも越えられない。

そう思った私は、一か八かという賭けにもなっていない行動に出た。

身体を引きずって倒れ込んだ刃の上。

次の瞬間、首に鋭い痛みが走って、目の前が暗くなった。

ゆっくりと意識が覚醒して行く。

「ヒッヒッヒ。お目覚めください。もう生き返っておりますよ」

そのいやらしい声に驚き、慌てて目を覚ました私は、目の前に異形のひと、その手に持たれた私の遺体があることに気づいて慌てて身体を起こした。

「わ、私、また死んだの!? というかあんなの通れるわけがない……」

「ヒッヒッヒ。ですが先程の考え方は悪くありません。死ぬ前に通り抜ける。死の恐怖を克服すれば、ある程度身体を失ってもなんとかなるかもしれないからね。ヒッヒッヒ」

楽しく会話するつもりはないけど、この人はヒントでもくれているのだろうか。

「も、もしかしてうまく通り抜ける裏技とかあったり……」

「しませんね。ヒッヒッヒ。実力で通り抜けるしかありません」

私の遺体を隣の部屋に放り投げて、異形の人は大きな目で私を見つめてそう言った。
まあそうだよな。

「ただ、刃に飛び込んで、気になったことがある。
うまく言葉に出来ないけれど、ほんの少しの違和感。」

その違和感が何か確認しようかと放送室から出ると……廊下では、太陽とマサフミが殴り合いの喧嘩をしていた。

「止まってても意味ねえだろ！ 言葉通り俺が背中を押してやったんだよ！」

「違うだろ！ お前のは違う！ ただ春香を殺したただけだろうが！ このクソ野郎！」

クラスでも目立つ二人の喧嘩を前に、昴と冬菜は止めることも出来ずにただオロオロしているだけ。

もちろん私にも止める勇氣はないけど、このまま放っておくことも出来なくて、仕方なく声をかける。

「ああもう！ 何してるのよ！ そんな元氣があるなら、ここを抜けるために使いなさいよ！ ただでさえ抜けられるかどうかかわからないのに、無駄な体力使って！」

こんなことを言っただからって止まるとは思えず、私は呆れて昴と冬菜のそばに寄った。

「は、春香さん……大丈夫……じゃないですよ。普通に死んでましたし」

「そう言われるのもなんかおかしい感じだけどね。でも本当にどうする？ 冬菜はともかくとして、私と昴なんて通り抜けられそうにないんだけど」

目の前でガシャンガシャンと音を立てて開閉を繰り返す巨大な刃に、今までとは違う恐怖を感じずにはいられなかった。

日本人形や笑う女なんかは、近寄らなければ大丈夫という安心感があつたけど、刃物は触れるだけでも怖いという感覚があるのに、その間を通り抜けなければならぬという条件が恐怖を大きくしていたのだ。

「こ、こう見えて僕は、大縄跳びの潜り抜けで引つかからなかったことが一度もありません。その結果、『鈍足大魔王』という不名誉なあだ名がついたほどです」

私も人のことは言えないけど、きつと私がダメなら昴もダメだろう。

冬菜は大人しいけど、見た目以上に運動神経がいいから、もしかすると抜けられるかもしれない。

「はあ……はあ……お前なんかと一緒にには行つてやらないからな！　うちの班に近づくんじゃねえ！　次は本気で殴るからな！」

「言つてる太陽！　お荷物を抱えて、ここを通り抜けられると思つてんのかよ！　俺でも無理なこの廊下をよ！」

やつと喧嘩が終わつたようで、離れて睨み合う二人。

マサフミは怒りの表情を見せつつも、私と昴を見て半笑いを浮かべる。

だけど、どうしてマサフミがここを通り抜けられないのだろう。

クラスでも運動神経はいいほうで、いつも人を小バカにしてさえているのに。

「す、すみません太陽くん。春香さんと鈍足大魔王がいるばかりに、こんなことを言われちゃうなんて！」

私と……は余計だと言いたいけど、本当にそうだから何も反論が出来ない。

それでも太陽は私たちには嫌な顔を見せずに。

「何言つてんだよ。頭を使うことは昴と冬菜に任せてんだ。身体を使うことくらい、俺と冬菜に任せろつての。お荷物だなんて思つちやいないぜ！」

そう言つてもらえて安心したけど……私の名前がどつちにも入つてくかない？

つまり、私は頼りにされてないってことだよな？

それに気づいた冬菜が、慌てた様子で口を開く。

「も、もちろん春香ちゃんにも大切な役割があるよ！　ムードメーカーだったり可愛かつたりするもん！」

「はは、ありがとと冬菜。あれ、おかしいな、何だか涙が……」

つまり私は賑やかしなだけかと悲しくなつたけど、運動も勉強も出来ないのは私自身が一番よくわかつてる。

だったら、なんでもいいから私はみんなの役に立つてやるんだ。

「そそそ、そうだけぞ春香！　気にするなよな！　うん、気にするなよ！」

太陽の言葉は励ましにもなっていない。

「もう！　いいから！　とにかくここを抜けなきゃならぬんだから！　どうする？　どうやって抜ける？」

巨大なギロチンのような刃が、人の命を奪おうと動き続けている。



今までのような、幽霊や怪物といったものではない。

無機質で、なんの意思も持たず人の命を奪う装置に、冷たく恐ろしいものを感じずには
いられない。

「ま、まずはタイミングを見ましよう。『ガツシャンガツシャンガツシャン』の、『ガ』の
タイミングで閉まっています。だから『シヤ』のタイミングで飛び込めば……」

鼻の言いたいことはわかるけど、頭で考えるとわかりにくいな。

しかし、冬菜は言われた通りに刃の動きを見ながら、タイミングを合わせているよう
だった。

刃の動きを目で追う冬菜。

何度か目を左右に動かしたあと、タイミングを見計らい、身体を小さくして最初の刃に
飛び込んだのだ。

「ひっ！ 冬菜っ！」

何も言わずに飛びこむものだから、思わず声が出てしまったけど……当の冬菜は、一番
目と二番目の刃の間に立ってホッと胸を撫で下ろしていた。

心臓が悪い。

友達が死ぬかもしれないと思うと身構えてしまっし、正直その惨状は見たくないから。

「ケッ。最初は誰でも通れるんだよ。でも次は天井と床から出てくるんだぜ。少しでも遅
ければ、足がスッパリ切られるんだ」

私を突き飛ばしたくせに、何を偉そうに解説者みたいなことを言っているんだか。
と、呆れて首を横に振っていたときだった。

「春香ちゃん、昴くん。一つずつ一緒に越えよう。みんなで一一緒に」
二つ目の刃を前に、タイミングを見計らっているかと思つたら、振り返つて私たちに手招きをしたのだつた。

そんな無茶な驚き、昴に顔を向けると、私以上に驚いている。

マサフミを見ればわかることだけど、仲間うちの誰かが通り抜ければ、自分は失敗しても大丈夫というわけではない。

太陽と冬菜がクリア出来たとしても、私と昴は自力で通り抜けなければならないのだ。そう考えると、冬菜の提案は決して間違つてはいない。

「ははっ。そうだな冬菜。俺たちは『春夏秋冬班』なんだ。みんな一緒に、力を合わせて行こうぜ。誰かがダメでも、他の誰かがカバーすればいいんだからよ」

太陽が笑つてそう言うけれど、私と昴にとってはプレッシャーどころではない。

出来ないことが出来るようになったら、そりやあ嬉しいけどさ。

今回ばかりはそんな話ではないんだ。

少しでもミスをしたら、身体の一部がなくなつてしまうのだから。

「お前ら、頭がおかしくなつたのかよ。お荷物二人を連れて、一緒にだど!? そんな全員まとめて死ぬのがオチだぜ！」

「うるせえな！ こつちの班のやり方に口出しするんじゃないやねえよ！」

マサフミの発言に対し、反応しなくてもいいのに太陽が反論する。

「ヒツヒツ。あなたは一緒に行かなくてもよろしいのですか？」

異形の人がマサフミに尋ねたけれど、顔を歪めて悔しそうにこちらを見ているだけだつた。

「ぼ、僕たちが行けますかね。春香さん……自信はありますか？」

「そんなのあるわけないでしょ……でも、どうせ行かなきゃならないなら、太陽と冬菜におんぶにだつこでも行つてやるんだから。もう何度も死ぬのなんて嫌だからさ」

何度も身体を切り刻まれる苦痛は、もう二度と味わいたくない。

だからこそ、何だつていいからこの刃の地獄を通り抜けたいのだ。

「わ、わかりました。僕も覚悟を決めます。みんな一緒になら抜ける……頼りにしてま
すからね、太陽くん」

「おう、任せろ鼻」

なぜだろうか。

こういうときに太陽が任せろと言くと、妙に安心が出来るのは。

ついさつきまでは、日本人形や笑う女、山田といった人智を超えた怪物が相手だったからか、頼りないと思うこともあったけど、今回はそうじゃない。

無機質な道具が相手なら、妙に頼りになると感じる。

当然、太陽にしても冬菜にしても、怪物が相手だから怖くないというわけではないと思う。

失敗すれば怪我をするし、最悪の場合は命を奪われるからだ。

それなのに、みんな一緒に行こうと言ってくれるなんて。

私は、いい友達に恵まれたんだな。

などと感動していたけど、だからといってここを通り抜けられるかどうかは別問題だ。

私たちの命を奪おうと、派手な音を立てて開閉し続ける巨大な刃が怖くないはずがない。

「さ、三人一緒に行くと、両端の人が危険です。ここは一人ずつ、刃が合わさる部分を

通ったほうが安全に通過出来る可能性が高いでしょう」

「じゃあ、そのタイミングで押すからな。そのほうが素早く通り抜けられるだろ？」

「いつ!? た、太陽くん! 二つ目の刃もあるんですからね!? 力いっぱい押すのはやめてくださいよ!」

そんな二人のやり取りを見ながら心を落ち着けていると、タイミング良く押された鼻が、冬菜に受け止められて成功。

ホッと安堵の吐息を漏らしたと同時に、太陽に腕を掴まれた。

「ほら、次は春香だからな。せーので行くから、タイミング合わせて飛べよ? 行くぞ、

せー……」

「ちよちよちよ、ちよつと待つてえ! 冗談でしょ!? まだ心の準備が出来てないのにいきなり押すとかやめてよマジで死ぬから!」

なんの心構えもないのに、いきなり押そうとするなんて何を考えているんだろう。

マサフミが押したのと変わらないでしょそんなのは!

「じゃあいつならいいんだよ。こういうのは思い切って行かないといつまで経っても行け

ないんだぜ?」

言いたいことはわかるけど……まだ心の準備が出来ていないんだよ。

「わ、わかった。わかったから。深呼吸したら行くから」

太陽にそう言つて、大きく深呼吸をした。

刃の動きを目で追つて、いつでも飛び出せる準備は出来たけど……やつぱり怖さはある。

「じゃあ行くからな。もう止めないぞ。はい、せーのっ!」

背中にドンツという強い力が加わる。

それに合わせて飛んだ私は……髪の毛が十センチほど切断されたけど、なんとか最初の

刃は通り抜けることが出来た。

昴と冬菜に受け止められて、二つ目の刃に突っ込まずに止まった。

「よつと、これで全員が最初をクリアしたな。まあ、マサフミも言つてたけど、二つ目は

横じゃなくて縦に刃が閉じるのが厄介だよな。どうする?」

私と昴は命懸けだったのに、あつざりとクリアした太陽にちよつとだけ腹が立つな。

まるで何ごともなかったかのように、私の大騒ぎは何だったのだろうと思つてしまう

から。

「ま、まあ最初だからな。次で秋本と菜花は死ぬだろうな。あいつらじゃ無理だからよ」

「ヒヒヒヒ。あなたは一緒に行かれないので?」

「なんで俺があいつらと行かなきゃならねえんだよ! あいつらが死んだら行つてや

るよ」

強がっているのか、それともただ私たちが成功したのがおもしろくないのか。

イライラした様子で異形の人にマサフミはそう言つていた。

確かに、マサフミが言うようにさつきとは違う。

二つ目は上下から刃が襲うのだ。

今度は、少しくらいなら遅れても大丈夫だなどという、甘い仕かけではない。

少しでも遅ければ足が切断されてしまうし、頭上から襲つてくる刃に頭を割られる可能性

性だつてある。

いや……私の身長なら頭よりも、下から飛び出す刃に気をつけなければならぬのだ。

「これはこれは……また随分過酷ですね。次こそ、足の一本でも失う覚悟がないといけな

いかもしれせんね」

昴がそう言うも、太陽と冬菜は刃の動きを見ながら何かを考えている様子で。

「うーん。じゃあまず私が行くから、太陽くんが押してくれない？ ちょっと難しいかも
しれないから」

「わかった。力加減も難しそうだよな、今回は」

そんな話を簡単そうに言える二人が凄いよ。

まあ、結果として、冬菜は太陽に押してもらつていとも簡単にクリア。

そのあとに続いた昴も、大騒ぎをしながらなんとか通り抜けて、私も服が切断されたけど
どなんとかセーフ。

太陽もクリアし、全員で三つ目の刃までやつて来た。

ここまで来て、やつとわかることがある。

刃の動きの関係で、三つ目の刃までしか見えなかったけれど……そのさらに奥に、体育館
へと続く廊下に、振り子のように横に揺れる半月状の刃が列を成して存在していたのだ。
「マジか……これで終わりじゃなかったのかよ。体育館の手前まで続いているのか？ 何

にしても……まずはここをクリアしないと。今までの二つの刃が同時に襲ってくるぜ。
さつき、春香が死んだところだ」

「た、確かに死んだけど……なんか言い方！」

やつとここまで来たというのに、まだ続きがあるのは絶望だった。

どうしてさつき死んだときに、この先を覚えていなかったのか。

それが悔やまれてならなかった。

「ど、ど、どうする……どうするのこれ。私、ここで死んだんだよ。行けそうなの？ ど
うなの？」

私の問いに、冬菜は小さく唸って。

「さつきより動きがわずかに早くなってるね。
だけど……パターンは不規則というか、毎回

同じじゃないみたい」

よく見てみると、冬菜が言った通り何度かに一度、わずかに動きが止まる瞬間がある。



そのタイミング通りに飛び込めばなんとかなりそうだけど、これが私が覚えた違和感なのだろう。

「だけどこれ、不規則なんだろう？ 止まったことに気づいて飛び込んだら、多分綺麗に真つ二つにされるんじゃないの？」

「そうかもね。この止まる動きが、私たちの動きを誘ってるんだと思う。マサフミくんもきつと、ここを越えられないんだよ」

「はっ！ だったら俺たちみんなで越えてやろうぜ。俺たちの班をバカにしたあいつを見返してやろうぜ！」

私としては、無駄に一回殺されたようなものだし、その意見には賛成だったけど……どうやら冬菜はそうでもなさそうぞ。

「マサフミくんは嫌な人だけど、まだ悪魔と入れ替わったわけじゃないんだよ？ 私たちと同じように、この世界に閉じ込められて、元の世界に戻りたいと思ってるんだよ？ なのに、ここに置き去りにして行くの？」

そうつぶやき、刃の向こうにいるマサフミのほうを向いた。

縦に閉まる刃と横に閉まる刃の隙間から、その表情を見るに、焦りを感じているような、寂しそうな表情に見える。

「あーもう、面倒臭いんだから！ マサフミ、早く来なよ！」

刃が閉まる音に負けないように、大声でそう叫ぶと、驚いたのはマサフミだけでなく、太陽と昴もだった。

「お、おい春香！ マジかよ！」

「そうですよ！ 彼は春香さんを押して殺したんですよ!？」

まあ、こういう反応が来るのは予想していたけど、私だってさっきのことを許したわけじゃない。

許したわけじゃないけど……

「だからって、クラスメイトを見捨てるなんて『春夏秋冬班』らしくないじゃない。みんな仲良く、助け合って学校生活を送る。でしょ？」

私たちが話している間に、何度もここまでは通っているのだろう。

マサフミが私たちのいるところまでやって来て、訝しげな表情で私を見つめたのだ。

「なんで……なんで俺を呼んだんだよ！ お前らだけで行けばよかつたじゃねえか！」
なんで面倒なことを言うんだよこういうヤツは。

「お礼なら冬菜に言いなよ。それに、あんたみたいないやツでも、元の世界に戻れないなんて可哀想じゃない。喧嘩をしたいのなら、元の世界に戻ってからいくらでもやりなよ。だけど今は違う。みんなで生きて、元の世界に戻るよ」

言い出しつぺの冬菜は微笑んでいるけど、太陽と昴はまだ納得はしていないような表情。まあ、ついさつきまで殴り合っていた人と、いきなり協力しようなんてのは無理な話だ。喧嘩をしたら一週間は口も聞かないことなんてざらなのに。

「そ、そうか。なんか、悪かったな。カズキに置き去りにされてイライラしてた。雪丸もありがとな。でも太陽、お前は死ぬばいから」
よせばいいのに、わざわざこんな場所でまた喧嘩を売るんだから。

「……なあ、やつぱりこいつぶん殴っていい？」

「太陽も本気にしないの！ 話を戻して、問題はここなんだよね。今までより動きが複雑というか、読めないから、飛びこむタイミングがわからないんだよね」

前二つより動きが早いかなと思っただけど、遅いときもあつたり、ほんの一瞬動きが止まることもある。

「おいマサフミ。仲間に入れてやったんだから、何か知ってることがないのかよ。あつたら教えろよな」

「ああ!? 調子に乗ってんなよ太陽！ なんもん知ってたら、とつくにクリアしてんだよ！」

間違いなさすぎて何も言えない。

ここまでやって来た運動神経を見るに、何かを知っていたならとつくに通り抜けていそうな気がするから。

「あー……でもよ、カズキが何かおかしなことを言ってたな。『静かにしろよ。聞こえないだろ』って」

聞こえないって……何か？

このガシャンガシャンという開閉する刃の音に何か秘密があるのだろうか、耳を澄ませ

してみるけど……こんな大きな音、話をしていても聞こえないなんてことはない。けど、どこか聞き覚えのある音のような気がする。

ガシャンガシャガシャガシャン……ガシャシャンガシャン……ガシャン……ガシャガシャンガシャン。

「……あれ、これつて。に……しにそ……おびえる、あ……おい……やま……つて、うちの学校の校歌じゃない？ まるで演奏してるみたいに開閉してる」

「はあ？ お前頭大丈夫かよ。なんでこんな殺人マシーンが校歌を演奏してんだよ。適当なこと言ってるじゃねえぞ！」

思ったことを言っただけなのに、いきなり怒らないでよね。

マサフミは情緒不安定なのか。

「信じないならいいよ。でも本当に校歌なんだから。確信があるから、見ててよ」

そう言っただけ三つ目の刃の前に立った。

何も知らなければ、ただ身体を切断するだけの恐ろしい殺人マシーンだけど、校歌に合わせて動いているというならタイミングがわかる。

「……し……ぎの、ち……からよ、し……ぎ……しようがつ……う……つ！」

最後の「う」のタイミングに合わせて刃に飛び込んだ。

大縄跳びが苦手とか、運動神経が悪いとかは関係がなかった。

私でさえ、簡単に通り抜けることが出来て、着地したと同時に背後で刃のドアが閉まる音が聞こえた。

「春香ちゃん凄いい！」

「やるじゃないですか春香さん！」

「マジかよ春香！ やったな！」

口々に褒められて、悪い気はしない。

これほど褒められることなんてないから照れてしまうよ。

「ま、まあね。私だつてこれくらい出来るってことだよ」

少し得意になったものの、みんなはタイミングを合わせられるかな。

それが気になった私は、またタイミングを見て元の場所に戻った。

「じゃあ、最初は誰から行く？ やっぱり冬菜から行つておく？」

「うん。でも私は大丈夫だから。昴くん、一緒に行こうよ。一番不安そうだし」

そう言っただけで差し出された冬菜の手を、緋りつくように握り締めた昴。

普通なら照れて繋げないか、意識してしまふんだらうけど……昴は生きるために必死という感じだ。

「おおお、お願いします！ 恥ずかしながら僕は、音楽と体育が壊滅的にダメなんですよ。いつも校歌斉唱は口パクか鼻歌で乗り切っているんですよ」

「恥ずかしいなら言わなくていいから。じゃあ、一番の『青井山』の『ま』で背中を押すからね。しつかり冬菜に合わせなよ？」



「一番の青井山……青井山……わ、わかりました！」

そこからはもう簡単だった。

タイミングを合わせて昴の背中を押し、そして太陽、マサフミと続いて最後に私。不規則な動きと思われた刃も、実は規則的に動いていたんだ。

そしてもう一つ気づいたことがあった。

刃の音がうるさくて聞こえなかったけど、スピーカーから校歌が小さく聞こえていたのだ。

先に行ったというカズキは、この校歌を聞いていたのだろう。

そして、マサフミが置き去りにされたということは、目の前で左右に振られている刃の振り子にも殺されることなく、クリアしたのだからということになる。

「菜花、お前……なんで戻ったんだよ。そのまま先に進めばよかっただろ？」

無数に続く振り子のタイミングを見てみると、マサフミが不思議そうに尋ねて来た。

「なんでって……そんなの、冬菜はともかく昴と太陽がタイミングなんてわかるわけないでしょ。それにあんたもわからないから抜けられなかったわけだし。だったら助けないと

みんなで元の世界に戻れないじゃない」

別におかしいことは言っていないと思うし、それが友達つてもものだから。

「……そうかよ。お前、思ったよりお人好しだよな」
褒め言葉として受け取っておくよ。

ここまで来ることが出来ても、ここから先に行けなかったら意味がないから、私は刃の振り子を凝視した。

刃と刃の間隔は多分二十センチほどで、その隙間で待つことはほぼ不可能。

その一つ一つの刃が振れるタイミングもバラバラで、奥までよく見えなかった。

なんとかこれを避けることが出来ないかと、左側にある児童玄関のドアに駆け寄った太陽。

運悪くというか、案の定というか、ドアはガツチリと閉まっていて開かない様子。

「また校歌に合わせて行けばなんとかなりそうな気もするけど……タイミングを計って無理矢理抜けられそうな気もするよね。動体視力と反射神経と運動神経が必要だけど」

そんなのが出来るのは、太陽と冬菜だけじゃない。

となると、私は校歌に合わせて行けるタイミングを見つけるしかないけど……そうすると扉が置き去りになってしまう。

今回ばかりは一緒に行けるようなスペースがなく、立ち止まれる場所があるかどうかもわからない。

一度刃の中に入ったら、止まらずに進む覚悟を持つしかないのだ。

なぜなら、先がまったく見えないから。

「フィンファンフィンフィンフィンフィンフィンフィンフィン……」

スピーカーから流れる校歌に合わせて指を横に振ると、なんとなくとあるタイミングで通れるんじゃないかなと思えてくる。

なんとか一人でも渡れるように、扉にタイミングを教えたかったから、必死に覚えた。だけど何度タイミングを計っても、奥が見えなければ確実なことは言えない。

最初のほうはこのタイミングだと伝えられても、奥がどうなのかはわからないからだ。

「難しそう？ とりあえず私と太陽くんで先に進んでみるよ。強引にでも通り抜けられれば、少しは何か伝えられるかもしれないし」

「うん。わかった。でも気をつけてね」

冬菜の提案に、その程度のことしか言えない。

いや、他のことを言えるほど、私は何かを知っているわけではないのだ。だから任せるしかなかったというのが本音だ。

「よし、じゃあ俺から行ってくるぜ。前の振り子の動きを見ながら……だな。任せとけ」

もしかすると太陽なら簡単に行けるかもしれない。

そう思っただけで校歌を口ずさみながら、太陽と刃の振り子を見ていたときだった。

「今だ！ うおおおおおっ！」

ここがチャンスと思っただのか、ただのやぶれかぶれか、太陽が刃に向かって全力で駆け出したのだ。

「嘘でしょ！」

驚いたのはここに全員。

あんなやり方じゃ、あつという間に切り刻まれて終わってしまう……と思っただけ。

しばらくすると、奥のほうから太陽の声が聞こえた。

「いててて……ちよーつと怪我しちまつたけど、なんとか抜けたぜ！ おーい！ タイミングが合えば、一気に走り抜けられるぞ！」

いや、そんな芸当は太陽くらいしか出来ないでしょ。

「た、太陽の百メートル走のタイムって何秒？」

私が尋ねると、マサフミが悔しそうに口を開く。

「くそっ！ 十三秒八八だ。県大会で二位の記録だぞ。真似が出来るかよ！」

それは……私たちにはとても無理だ。

鈍足大魔王の鼻には、絶望に近い記録だよ。

だけど、太陽が通り抜けたという事実は、この怨念が凝り固まったような、醜悪な壁や天井に囲まれた私たちに希望を与えてくれるものだった。

「じゃあ、次は私。太陽くんみたいには出来ないけど、大丈夫。ゆつくりやればいいんだ。

ゆつくり確実に」

そう言っただけで刃の振り子の前に立った冬菜。

スピーカーから流れる校歌にも耳を傾けて、刃の振り子のタイミングを見ながら、びよ

く〜は〜は〜た〜かん〜……」

普段は大して歌いたくもない校歌だけど、これほど助けられるとは思わなかったよ。

「春香ちゃん、大丈夫!？」

その声に目を開けると、心配そうにしている冬菜と、床に座りこむ太陽の姿が。

慌てて後ろを振り返った私は、乗り越えられたんだと安堵した。

「よ、よかった……私しか死ななかつたけど、結構時間がかかったね。あとは昴だけ

ど……つて、太陽!? 足が!」

ちよつと怪我をしたと言っていたから、かすり傷でも負ったのかと思っていたけどとん

でもない。

右足首から先が切断されて、上半身裸になつて服で止血をしていたのだった。

驚いたのはそれだけではない。

腹部から悪魔と入れ替わっている太陽の身体は、もう胴がほとんど悪魔になっていた。

今までは服で隠されていただけだったのだ。

「気にすんな気にすんな。倉庫に入れて書いてあるから、どうやらここの倉庫がゴール

みたいなんだよな。危なくなつたら一足先に入らせてもらうからよ。ギリギリまで、友達が全員クリアするのを待たせてくれよ」

「太陽くんらしいよね。でももうすぐだよ。ほら、昴くんも半分まで来てる。ちよつと……危なつかしいけどね」

冬菜が指差している場所に目を向けると、昴の悲鳴にも近い声が聞こえる。

「いち! に! いち! に! いちやはつ! あぶ、あぶ! ひやはつ!」

「落ち着けよ秋本! テンポを乱すな!」

パニック状態ながらも先に進む昴と、そんな昴を応援するマサフミの声だ。

立ち止まつてはいけない。

だけど、今にも昴は恐怖のあまり立ち止まつてしまいそう。

「あ、あ、あわわっ! ぼ、僕はどうすれば!」

「ダメ! 昴! 止まらないで!」

私が声を上げると同時に、パニック状態の昴が足を止めてしまったのだ。

刃が横から昴に迫る。